園・小学校へのペアトレの応用
効果的に応用するための工夫

◎課題：個に関わる時間が短く、行動分析や実践の機会が少ない

- **活用の工夫**

学級指導に観察の仕方・工夫を取り入れ、
個別対応の時間を捻出する

工夫を変わりやすい子どもから始め、
手厚い支援の必要な子どもへ移す

↓

ペアレント・トレーニング
―パッケージの利点と配慮点―

- 利点
  - ◎普及に貢献
  - ◎頻繁に適用する技法が含まれている
  - ◎使い勝手がよい
- 配慮点
  - ◎形式的な技法の適用を避ける
  - ◎技法の運用と適用に配慮が必要

↓

園・小学校へのペアトレの応用
効果的に応用するための工夫

◎課題：「行動分析が難しい」という声　Why？

⇒ 変容しやすい行動への対応は、できている。しかし気づいていない

⇒ 変容しにくい行動が対象になっている

- 活用の工夫

既存の効果的な関わりから行動分析することで、
観察・工夫の仕方（ペアトレの技法）を習得できる

先生が自己強化し、他の行動に目標を広げられる

↗

技法の運用と適用への配慮

- 強化　⇒　強化対象の明確化を
  強化の取り決めの確認を
- 行動そのもの強化体験である場合
  ⇒　環境調整、行動の流れの調整を

発達特性をふまえた技法の最適化

- 本質的な行動分析　「刺激」→「行動」→「結果」
  ⇒　行動の因果関係のサイズの見極めを

実践に基づく理論の仮説・検証

↗

まとめ（1）

- 肥前方式親訓練では、行動変容に重きを置いており、目標行動を定めて個々に取り組む
- 親が子どもの行動の観察の仕方を学び、目標行動以外にも効果的な対応を広げていくことを目指している
- 親は、養育上の知識や子育への自信を高める
- 子育ストレスや抑うつを軽減する効果がある

→

まとめ（2）

- 親は子どもの発達特性を前向きに捉えることができる
- 園や小学校にペアレント・トレーニングを応用することで、発達特性理解が進んでいない親子への支援が実現する
- 園や小学校での支援効果に気づくいた親は、支援の必要性を実感することができる
- ペアトレを実施できる支援者要請研修が必要である

参考資料

1）肥前方式親訓練　−その特徴と地域への展開−　　温泉美雪
小児の精神と神経　第52巻第４号317−319.　2012年12月
　肥前方式のペアレント・トレーニングの特徴、成否のポイント、園や学校への普及に際し課題となることや配慮点について論じている。

2）発達障害を知る　ペアレント・トレーニング　　中田洋二郎・温泉美雪
　Journal of Clinical Rehabilitation　第22巻第２号201−205.　2013年２月
　関係強化アプローチをとる精研方式と、行動変容アプローチをとる肥前方式の特徴について述べた上で、両者ともに親としての自信などの認知変容を果たすなど親の健康保健に効果があることを論じている。

3）子育支援とペアレント・トレーニング
家庭で役立つ行動分析　〜行動分析で子どもの行動を理解し対応を工夫する〜　温泉美雪
チャイルドヘルス第16巻第11号37−40（791−794）.　2013年11月
　子育て支援に関わる支援者向けにペアレント・トレーニングについて紹介する特集の一稿として、肥前方式ペアレント・トレーニングを紹介。行動分析に基づいて子どもの行動を理解し対応を工夫するペアレント・トレーニングの経過について、事例を通じ論じている。

カ．ペアレント・プログラムの作成と実施

1．発達障害児支援における課題

・医療モデルと社会(発達支援・生活支援）モデル

医療モデル：

乳幼児健診でのスクリーニング　→　スクリーニング後、フォローアップ　→　医療機関への受診・診断　→　療育サービス

実際の子育て：

子育ての難しさ・発達をめぐる不安　⇒　相談／ガイダンスで終了　⇒　子育て支援グループ（療育機能を持つ場合もある）／相談できずに孤立・虐待的状況　⇒　保育園・療育機関

→医療モデルでは実際の子育てニーズと整合せず，うまくいかない。さらに，専門機関・医師の数や生活環境など地域格差が非常に大きく、なお拡大している。

・支援の乏しい地域における現実的な問題

子育てにおける悩みを抱える母親や集団適応の難しい気になる子に対する支援のニーズは非常に高い。しかし・・・

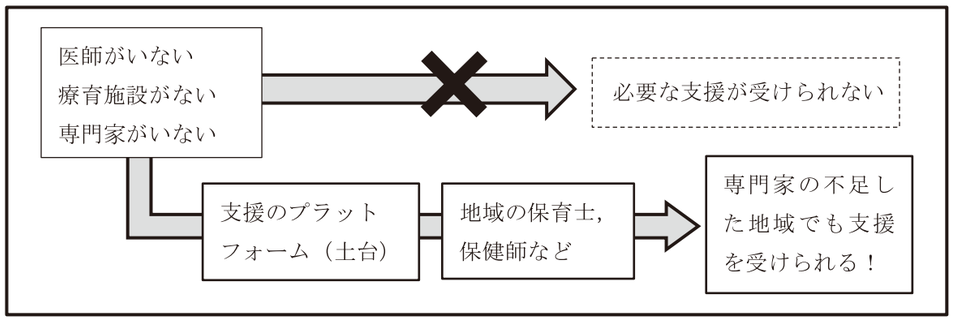
×専門医がいないので支援ができない

×療育施設がないと支援ができない

×専門家がいないので支援ができない

そのため，医師や専門家による支援だけでなく，地域の保育士や保健師、障害児事業所の職員が支援に必要な標準的な支援方法を習得し、実施できれば、専門家の不足している地域においても支援のスタートが可能である。

本事業では，全国どこであろうと、専門家がいようといなかろうと、支援がスタートできるためのプラットフォーム（土台）となるプログラムを創ることを目指した。



支援のプラットフォームづくりによる，地域の保育士，保健師などの資源を活用した支援

2．ペアレント・トレーニングによる家族支援

近年世界的に、ペアレント・トレーニング（以下，ペアトレ）という形で発達障害児の支援のスタートを取り組もうという動きがある。ペアトレとは応用行動分析（以下，ABA）をベースに開発された支援技法で、親自身が子どもの行動のなかで目標行動を定め、行動の機能分析をし、環境調整や子どもへの肯定的な働きかけを習得していくことで子どもの発達促進を行っていく。現在日本で行われている様々なペアトレの実践については，V 章で紹介している。

精研式や奈良方式，肥前式等でそれぞれの特徴はあるが，いずれも ABA の専門知識をベースとした技法を用いて，親が肯定的・効果的に子どもの適応行動を促進している。しかし、精研式ペアプロや肥前式ペアプロが取り組みの有効性（エビデンス）を確立してきた一方で、ペアトレで用いる技法を理解することや，習熟するためのプログラムに専門家の支援は必須であること，ペアトレが実施できる専門家や施設の不足から普及が難しいという課題が挙げられた。

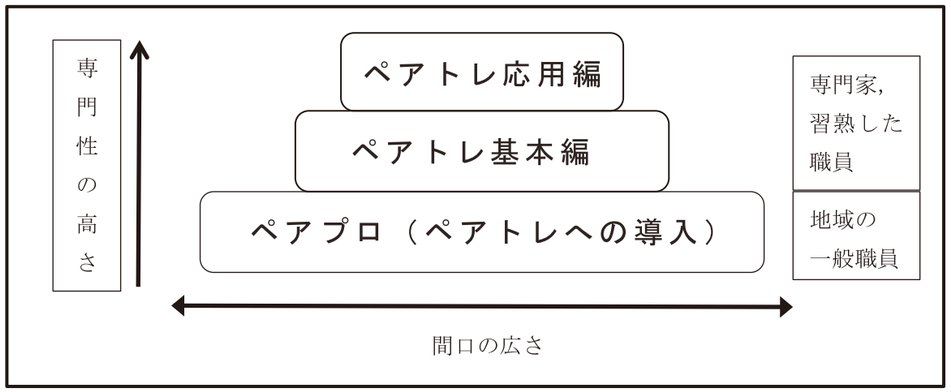
3．家族支援の導入としてのペアレント・プログラムの作成

1）ペアレント・プログラムとは

上記の医療モデルや地域格差による問題，ペアトレの普及の難しさなどの各種課題の解決のため，ペアトレより簡易な内容で取り組みやすく，地域の保育士や保健師，障害児事業所の職員でも実施可能な家族支援プログラムを作成することとした。

このプログラムはペアレント・プログラム（ペアプロ）と名付け，扱う内容の柱として，「行動でみること」「ほめ方のバリエーションを増やすこと」「親自身や子どものいいところ，努力していることなど，肯定的な面を発見しやすくすること」を設定して作成した。特にペアトレと異なる点として，分かりやすく基本的な内容のみ扱うことから子どもの行動修正までは目指さず，あくまでも「母親の認知を肯定的に修正すること」に焦点を当てている。

これまでのペアトレは，通常の子育てでは改善の難しい子どもに対しての専門的で効果的な関わり方として実施されているが，ペアプロは上記の通り非常に簡易で焦点を母親の認知の修正に絞っていることから，子どもに発達障害やその傾向があるなしにかかわらず有用な方法といえる。



ペアプロとペアトレの関係，実施者の想定

2）ペアレント・プログラムに参加することで期待される効果と想定される限界

ペアプロに参加することにより，母親に以下のような効果が期待されると想定した。

・母親の精神的健康…BDIで抑うつ評価が有意に低下する。
・母親の養育スタイル①…叱責(叱ること)での働きかけの減少
・母親の養育スタイル②…肯定的対応（褒めること）での働きかけの増加
・地域の支援とつながる…プログラム中に地域としてのニーズの把握ができ、プログラム後、必要な支援や保育園などへの移行がスムーズ
・地域の仲間とつながる…プログラム後の連絡を取って、地域の資源などの情報交換をする

一方で，ペアプロは専門的な技法をベースとしながら，内容を限定してペアトレへの導入編となるより簡易なプログラムを目指したことから，知識や技法自体の効果は制限されることも推測された。特に，子どもが診断を受けていたり，診断を受けないまでも集団適応が難しい状況がある子ども，生活で不適応にいたっている二次障害を起こしている子どもを持つ場合には，問題の解決は難しい。ペアプロは子どもの行動改善を目指すものではなく，あくまでも子どもを行動で理解することを柱とした母親の認知の変容と，ほめるという肯定的な関わり方のレパートリーを広げるものであるという限界を，実施者やスタッフも把握しておくことも必要である。さらに，ペアプロでの支援では不十分と想定される母親には，ペアプロをきっかけとしながら，その後のフォローや外部の専門家・専門的支援の紹介へとつなげていく役割を担うことが重要である。

3）ペアレント・プログラムの位置づけ

上記の概要と期待される効果，想定される制限から，ペアプロを以下のように位置づける。

前提①：　すべての保護者を対象とする。特に低年齢の子どもを持ち，子育てに困り感のある保護者等への子ども理解と関わり方の支援を行い，診断の有無は前提としない。プログラム中では、「障害」という用語は用いず，子どもの「個性」や「苦手」という表現で十分で、障害を拒否する保護者も利用が可能である。

前提②：　母親が現実的に子どもの行動に対応できる認知に修正して、次の地域の資源につなぐ。母子療育などのスタートにも使える。

前提③：　ペアトレよりも簡易な内容であることから，地域の一般的な支援職(保育士、障害児福祉施設スタッフ等）が、業務の一環として実施が可能である。　⇒支援職スタッフ自身のスキルアップも可能となる。

前提④：　都道府県の発達障害者支援センターが普及の中心となる。　⇒すでに職員研修を実施している。

前提⑤：　地域での支援についての共通理解が可能になる。　⇒ソフトウェアの共通化は，支援者同士の連携を容易にする。

応用①：　地域の支援職が、子育て支援の機関に出張して実施することで多くの人が利用できる。

4）ペアレント・プログラムの具体的内容

ペアプロの実施時間は各60～90分，おおよそ隔週で全6回実施され，約3ヶ月を1クールとして設定した。

各回のワークと宿題の内容は以下のとおりである。詳細はペアレント・プログラムマニュアルを参照されたい。

・1 回目：　発達の多様性，個性にあった子育て，得意と苦手，伝統的な子育てからできることを伸ばす子育てへ！
　ワーク：「行動で見る」「現状把握表：自分編と子ども編を書いてみよう」
　宿題：「母親と子どもの現状把握表を書いてくる」「夫や身近な大人をほめてみる」
・2 回目：　行動で書く！のおさらい
　ワーク：「現状把握表：形容詞から動詞に，具体的な行動にする」「～ない表記を～する表記にかえる」
　宿題：「自分編の現状把握表を書き足す，修正する」「子どもをほめてみる」
・3 回目：　行動をカテゴリー分けしよう！
　ワーク：「現状把握表の行動を同じカテゴリーにまとめてみる：自分編と子ども編
　宿題：「現状把握表：自分編と子ども編をカテゴリー」「子どもをほめてみる」
・4 回目：　ギリギリセーフ！をみつけよう
　ワーク：「困ったところの中にある“ギリギリセーフ”を見つける」「できないことの中の“できること”をみつける」
　宿題：「ギリギリセーフを含めた現状把握表：自分編と子ども編」「子どもをほめてみる」「(可能なら）夫や身近な大人に現状把握表をみてもらう」
・5 回目：　ギリギリセーフ！を極めよう
　ワーク：復習「困ったところの中にある“ギリギリセーフ”を見つける」「できないことの中の“できること”をみつける」「いつ／どこで／誰と／何をしていると;困った行動があるのか？うまくいく行動があるのか？」
　宿題:「現状把握表:自分編と子ども編の完成版」「夫や身近な大人に現状把握表をみてもらう」
・6 回目：　ペアプロでみつけたこと！
　ワーク：「現状把握表：自分編と子ども編の完成版をみて，ペアプロを通してみつけたこと，行動でみることの有効性を確認する」
　まとめと次への展開：ペアトレへのつなぎ，地域での継続したサポート

4．ペアレント・プログラムの実施と参加者，スタッフ，運営担当者へのアンケート

1）実施会場とスタッフ，運営担当者

作成されたペアプロを実施するため，各地域の支援者と連携をはかり，名古屋市，相馬市，郡山市の3ヶ所で実施した。ペアプロにおける進行は専門家により行われたが，参加者やスタッフの募集，会場の設定，プログラムにおけるワークの補助などは各地域の運営担当者や支援職のスタッフにより実施された。

2）参加者情報

ペアプロに参加した母親を対象に，母親の年代と子どもの年齢，診断の有無についてアンケー

トを行った。その結果，母親の年代は全体平均で 35 歳，子どもの年齢は全体平均で 7.67 歳であった。また診断の有無については，データの得られた 21 名中 20 名が何らかの発達障害の診断を受けていた。各会場ごとの母親の年代と子どもの年齢，診断の有無の割合について以下の表に記す。各会場ごとの診断名の内訳は，名古屋市では自閉症スペクトラム 1 名，発達障害 2 名，広汎性発達障害 2 名，相馬市では自閉症 4 名，郡山市では広汎性発達障害 4 名（うち 1 名 ADHD 合併），自閉症 5 名（うち 1 名知的障害合併），アスペルガー症候群 1 名（ ADHD 合併），軽度知的障害 1 名であった。なお，名古屋会場で診断無しとなっている 1 名は，母親の記述で「診断はないが集団に適応しづらい行動から経過観察中」となっていた。

参加者情報の有効回答数と母親の年代，子どもの年齢，診断の有無と割合

会場	有効回答数	母親の年代 平均	母親の年代 標準偏差	子どもの年齢 平均	子どもの年齢 標準偏差	子どもの診断有りの数と割合	
名古屋市	6	36.67	(5.16)	6.83	(3.06)	5	83%
相馬市	4	40.00	(14.14)	7.25	(0.96)	4	100%
郡山市	11	31.25	(8.35)	8.27	(3.10)	11	100%
合計	21	35.00	(9.24)	7.67	(2.78)	16	95%

3）実施方法，会場設定等

ペアプロの実施にあたって，参加者やスタッフの募集，会場の選定と予約などは，地域の運営担当者に担ってもらった。実施スケジュールについても，ペアプロ実施の専門家と各地域の運営担当者が日時を調整の上で個別に設定され，基本的に隔週で全 6 回のプログラムが実施された。

4）ペアレント・プログラムの参加者，スタッフ，運営担当者へのアンケートによるプログラムの有用性と妥当性，課題の検討

（1）目的

ペアトレにおける現状と課題から，より簡易なプログラムの作成を目指してペアプロを開発したが，本事業における地域の職員による支援の普及という社会モデルの推進のためには，実際にペアプロに参加した母親やスタッフ，運営担当者からの反応を得ることが有用である。そのため，現地のスタッフや運営担当者より，子どもの発達支援に関わる専門家が不足し専門的な支援を受けることが難しい，また地域の保育士や障害事業所職員も専門的な知識や技法といった情報が乏しいという福島県の相馬市と郡山市にて実施したペアプロに参加した母親，スタッフ，運営担当者を対象に，プログラム最終回においてそれぞれペアプロに関するアンケートを行った。

（2）対象者，質問内容

アンケートの対象者と情報を対象者ごとに分けて提示する。アンケートの回答が得られたのは，参加者では 10 名（会場＝相馬市 2 名，郡山市 8 名，子どもの年齢＝4〜14歳，性別＝男子 5 名，女子 5 名），参加スタッフ 23 名（会場＝相馬市 15 名，郡山市 8 名，年齢＝26-59 歳，性別＝男性 1 名，女性 22 名），運営担当者 2 名（会場＝相馬市 1 名，郡山市 1 名）であった。

各質問内容は以下のとおりである。

・参加者（母親）…実施会場と子どもの年齢・性別を尋ねた上で，「お子さんへの関わり方について良かったこと」，「あなた自身について良かったこと，「ペアプロの内容やワークなどで難しかったこと」の 3 問について自由記述を求めた。

・スタッフ…実施会場と年齢・性別・職種を尋ねた上で，「ペアプロに参加して良かったこと・気づいたこと」，「ペアプロの内容やワークなどで難しかったこと」，「あなたの地域でペアプロを実施するとした場合の施設やスタッフなど，具体的なイメージ」の 3 問について自由記述を求めた。

・運営担当者…実施会場と参加スタッフ数，参加者（母親）の数を尋ねた上で，「プログラムに参加するスタッフや託児スタッフの募集とスタッフ間の情報のやりとりの方法」，「参加者の募集について具体的な広報や勧誘・申し込みの方法」，「ペアプロ実施に携わってみて良かったこと」，「ペアプロの準備や実施などで難しかったこと」，「あなたの地域で今後もペアプロを実施するとした場合の施設やスタッフなど，具体的なイメージ」の 5 問について自由記述を求めた。

（3）アンケート結果

アンケートの結果について，参加者，スタッフ，運営担当者のアンケート対象者ごとに結果を示す。

初めに，参加者のアンケートの Q1 「お子さんの関わり方について良かったこと」の回答一覧を以下に示す。特に，子どもを行動で理解できるようになった，ほめることが増えた，悪いところばかり目につきがちだったが頑張っていることも見つけられるようになった，などの感想が多くみられた。また，いいところが見えたばかりでなく，全部解決しなくてもいいと気づくなど，困ったところを受け止めながらも，子どもに合わせた理解や取り組みを心掛けている様子もみられた。

参加者対象アンケート　Q1 の回答一覧

子どもの年齢	子どもの性別	Q1 お子さんへの関わり方について良かったこと
4 歳	女	子どもを冷静に見れるようになり、生活を習慣化することによって、いろいろなことができるようになった。子供をほめれるようになりました。
5 歳	男	参加してから“ほめる”を意識するようになりました。年齢と周りを基準にばかりして、本当に怒ってばかりでした。やれてなくても、できてなくても“ほめてあげる”とできなかったことができるようになったことが増えました。外出はなるべくさけていましたが子どもと外出することが多くなりました。
5 歳	女	子どもの悪いところばかり目について怒ってばかりいたのですが、どうす

		れば子どもがわかりやすくできるようになるのかを考えることができるようになりました。
6 歳	男	困っていること、できていない事にばかりが目にいっていたが、その中でもできている事、頑張っていること、これからの課題が見つけられた。できていないことに集中して、多少厳しいことをしていたのかもしれない反省している。褒めて自信を持たせる子育てをやっていきたい。
8 歳	女	出来ていないと思っていたことは、実は何だかんだと言って少しずつ出来ているようになっていたということに気づいた。少しずつだけど成長しているんだなと実感できました。
10 歳	女	全部解決しなければいけないと思って焦っていたが、困っていることが理解できただけでもよかったし、前向きにとらえることができました。これからがんばりたいと思います。
11 歳	女	褒める事の大切さ、環境を整えることの大切さがわかりました。子供ができることが増え、自信がついてきているようにみえる。
11 歳	男	出来ない事よりも、できそうなところを見つけて、それをほめていくと、少しずつできたりするので、あまり怒ったりしなくていいのだと思いました。褒める事で自信がつく姿が、少しずつみられてよかったです。注意することよりも子に選択させて、自分でやっていけるようにこっそり導いてあげるといいのかなあと思いました。
14 歳	男	最初はほめても泣いてしまったり、名前を呼んでもわからないくらいの子にどうしていこう…と思ったのですが、「ギリギリセーフのところがほめるポイント」というのを教えていただいて、ほめ続けていると、少しずつ良い行動にシフトしていきました。十数年かわらなかったことでも。ポイントを見つければ 3 か月でこんなに変わるのかとびっくりしています。
―	男	具体的に行動することがわかってきた。健康は一番大事である。

参加者のアンケートの Q2 「あなた自身について良かったこと」の回答一覧を以下に示す。ここでは，子どもへの理解と関わりが肯定的・現実的にできるようになったことを反映して，母親自身の自己評価も肯定的になっている傾向がうかがえた。また，子どもや家族との関係，生活環境などについて振り返りながら見つめている記述もみられた。

参加者対象アンケート　Q2 の回答一覧

子どもの年齢	子どもの性別	Q2 あなた自身について良かったこと
4 歳	女	子どもの事でできないことを見て嫌になったり、自己嫌悪に陥ることが多かったが、できることを見て、子どもが好きになっている。
5 歳	男	今まで、なんでうちばかりと不幸を全部背負った気持ちでいましたが、参加しているみなさんに会えて、みんなもすごく悩んで頑張ってるんだなとしみじみ思いました。なんでも自分で決めてから主人には事後報告でしたが、まずは一番身近な人に協力してもらえるように主人とも子どもの事を 2 人で同じペースで進んでいきたいなと思いました。
5 歳	女	ひとりで悩んでしまうことが多かったが、いろんなお母さんの意見を聞いて参考にできたので良かったです。
6 歳	男	子どもと同様、できている部分もみつけられた。両親と同居し、私は仕事をしていない。経済的な面で不安はあるが、家族が協力してくれているありがたさを身にしみて感じる。仕事より子供を優先して過ごしてきた時間はよかったと思う。
8 歳	女	少し、自分も子供に対しても冷静に見れるようになってきた。無理せずゆっくりでいいんだと思えるようになってきた。
10 歳	女	子どもの事をみているようで見ていなかったことに気づいて、上の子どもたちもほめて育てられたのかな、って思いました。これからほめていきたいと思います。
11 歳	女	勉強ができ、実際の生活で活用できました。やるべきことが後回しにならなくなった。
11 歳	男	「努力している事」が「しよっかなと思った事」が入ることがとても楽な気持ちで取り組めて良かったです。参加したことで、たくさんの考えかたが聞けて、どんどん生活に取り入れていきたいと思いました。
14 歳	男	継続プログラムだったので、わかっただけでなく実際に行動をかえることができた。
―	男	時間を守ることや、勉強の押し付けはしないように自由にさせること。興味を持ったことにはすぐできるように協力をする。自然に向き合うことは大事なことである。

参加者のアンケートの Q3 「ペアプロの内容やワークなどで難しかったこと」の回答一覧を以下に示す。ここでは，中盤のワークで扱う“カテゴリー分け”や“困ったところのギリギリセーフ”に関して難しいとする記述やプログラム中にうまく言葉や表現が出ない，まとめられないなどがみられた。一方で，実際に取り組みながら少しずつ理解していけたことや，内容理解はひとによって難しいと思われるものの楽しかったとする感想もあげられた。

参加者対象アンケート　Q 3 の回答一覧

子どもの年齢	子どもの性別	Q3 ペアプロの内容やワークなどで難しかったこと
4 歳	女	困っている所の努力するところに持っていくのが、難しかったが、少しずつギリギリセーフを見つけることができた。

5 歳	男	カテゴリーの分け方と、そのカテゴリーにいいところしかないのはダメで、困っているところ、努力しているところどっちか埋めて成り立つカテゴリーを作るのは難しかったです。
5 歳	女	頭の中で考えをまとめるのに時間がかかり、毎回きんちょうしていました。
6 歳	男	子どもや自分のことを掘り下げて考えるのは最初難しく感じた。(具体的な行動)、(書き出すまで) にするまで時間を要した。
8 歳	女	何をどうまとめていいか、言葉や表現が出てこないことが難しかった。
10 歳	女	最初はできるかな？と思いましたが、現状把握表によっていろいろなことがわかって整理できました。ありがとうございました。
11 歳	女	困ったところのギリギリセーフがどうしても見つからないものがあった。
11 歳	男	宿題を継続してやっていくことが難しかったです。でも、発表したり、話し合ったりすることでもっと頑張ろうと思いました。カテゴリーを分けるときに、細かく分けすぎて、まとめるのが大変になり、どの時間帯なのか考えながら作っていくのが難しかったです。
14 歳	男	人によっては大変なプログラムかなと感じました。やってみてわかる部分は大きいのですが、そこに行きつくまでは、きついかも？です。でも楽しかったです。
―	男	何をどうしたらよいのかわからなかったが、少しずつではあるが理解することが出来てきた。両親の関わり方が私よりも大変であると思った。

次に，スタッフのアンケートの Q1 「ペアプロに参加して良かったこと・気づいたこと」の回答一覧を以下に示す。参加者の Q1 同様，ペアプロの内容についての肯定的評価も多くみられた。さらに，ほめて育てることについて具体的な方法と効果がみられたこと，職場での保護者への対応においてより具体的な子どもの行動の理解とアドバイスにつながったこと，母親への支援のみならず悩み相談や身近なサポートネットワークづくりの重要性への気づきなど，子どもの障害の有無によらず広く母親への対応に活用できるとの記述が多くみられた。

スタッフ対象アンケート　Q１の回答一覧

年齢	性別	職種	Q1 ペアプロに参加して良かったこと・気づいたこと
31 歳	女	支援員	行動で見ていくということ。できていない中にも努力して頑張っていることがあるということ。
32 歳	女	支援員	一つの物事において客観的に見ることができた。自分だけだと 1 方向で考えがちだが、他者の意見などを聞くうちに、保護者にどうアドバイスすればいいのかということから様々な方向（視点）から物事をとらえることができるようになってきたと思う。
35 歳	女	支援員	行動で考えること。本人が努力していることに気づいて認めること。保護者の思いを知ること。すべてにおいて、子どもと関わるうえでとても重要であるけれど、深く考えてみていなかった部分があったことに気づき、今回参加してよかったです。特に、自分の事業所で今回参加してくれた保護者とは数回話し合いの場も設けて、これまで知らなかったことを沢山知り、理解につながったと思います。
43 歳	女	支援員	今までは「うちの子〇〇が出来ないんだ」等の相談に、「うちの子もですよ」「大丈夫ですよ」といった感じの応えをしていたが、これからは具体的に「(できない行動の中でも）でもここは出来ているんだよね。ギリギリセーフだよ、OK　だよ」と伝えていきたいと思った。自分もですが、ママたちが避難したり、相談する仲間が少なく、子どもにイライラしてしまう環境は増えつつあると思うので、健診後のフォローはとても意味があると思います。
48 歳	女	支援員	“自分を知る”“子どもを知る”ことがしっかりと出来ていくプログラムだと感じました。現状把握表を書くことで、ギリギリセーフをみつけ、そこからの気づき、生活へ生かしていく過程が見ることが出来ました。
53 歳	女	事業所管理者	子どもさんの行動（様子・状況）について、形容詞でなく動詞で見て記入し、書き出すことでより具体的に行動分析ができる作業型・参加型の研修でとてもよかったです。行動分析→情報を父兄と共有できた。現状把握表のかつようについて、保護者さん子どもさんの良い所・出来ている所・努力している所をより具体的にほめることができる手法に接してとてもよかったです。(自分自身に置き換えると、保護者さんのがんばりがすごいなぁーとあらためて感じ取れた良い機会でした)
33 歳	男	指導員	出来ない行動（不適応行動）を何とかして適応行動に変えさせないといけないと思っていましたが、適応行動を伸ばしていくことのほうが大切なんだと気づきました。
33 歳	女	児童指導員	生活をしていると悩み（困ったこと）が大きくなり、後ろ向きになってしまいがちですが、ペアプロを受けたことによって良い所・ギリギリセーフを生活の中で自然にみつけることができるようになり、悩みが以前に比べて薄らいで前向きに考えれると思いました。
35 歳	女	障害児支援員	できないからとそこであきらめずに、できない中でのできること「ギリギリセーフ」をみつけることによって、子どものいいところを発見することができ、ほめることでできる方法や工夫を見いだせることができることがわかった。
33 歳	女	生活支	自分自身がご利用者と関わる中で、「なぜできない？」「なぜわか

	援員	らない？」と思っていたが、なぜできない？ではなく、ここまでできてるからよしとおもえるようになりました。また、保護者さんと話をしていても「うちの子はできない」と言われても「～までできている」や「職員の前では～です」等、保護者さんへ伝えることができるようになりました。現状把握表があることで自分の頭で整理できるかわからなかったところが徐々にわかるようになってきて良かったと思います。
45 歳　女	生活指導員・相談員	参加した保護者さんそれぞれ気づきがあった。怒るのが減ったりゆっくり子育てしようと思えたことがとてもよかったと思います。ほかのお母さん方のアイディアを聞くことができることや、思いの共有ができたりしてとてもよかったと思います。母が実現できる回数があるのはよかった。ペアリングははじめ難しかったが、どのペアリングでも気づきが見られたので良かったと思います。
54 歳　女	大学院生（保育士）	ペアレントトレーニングに比べてとても取り組みやすいと思った。3 か月 6 回という期間、回数が非常に適していると感じた。参加者の負担が少ない。「3 か月ならやれるかな」と思える。しかも見事に 3 か月で変容する。行動で見ること、ぎりぎりセーフを見つけることとポイントを絞ってママをターゲットにしていることで成功していると感じた。欲張らないけど大事なことは繰り返しの中で獲得する。
30 歳　女	保育士	“ほめる”ということ、ほめて育てるとはよく言われますが、そこからどう変わっていくかはあまり関心がないことが多いと思います。現場でも“ほめる”“客観的に見る”ということが増えました。どこをどんな風に整理していくかがわかり、より具体的にその子が今困っていることはどうすればいいかを以前より考えやすくなりました。
33 歳　女	保育士	ペアレントプログラムの実施の方法、すすめ方がわかりました。支援者がどのようなアドバイスを行っていけば良いのかがわからなかったが、回数をこなすことにより具体例等がわかってよかった。
45 歳　女	保育士	お母さんたちが 6 回の支援の中でこんなに（お母さんたちの頭の中が整理され）前向きに子どもさんに向き合えるようになったことに驚きました。この方法を知っているのと知らないとでは親子の関係やそのあとのお子さんの育ちもずいぶん変わってくるのではないかと思います。似たような立場の方とお互いを認め合いながら話せる場をお母さん（お父さんにも？）達に作ってあげることはとても大切なことだと思いました。

53 歳　女	保育士	自分の子どものよいところ、悪い所はある程度理解していると思ってましたが、行動で捉えることで、困った困ったと嘆くよりも、どのような時のどんな行動化を再確認し、でも本人なりに頑張ってきた様子も思い起こせ、納得できることが出来ましたし、ある意味ギリギリセーフで暮らしてましたと思いました。
59 歳　女	訪問支援員	お母様方が参加され、活発に話されていたことが嬉しく思えました。しっかり宿題をしながら取り組まれていたことも同様です。
26 歳　女	保健師	ほめることで行動が変わること、親子や家族の関係もよくなること、すごく大切なことだと思いました。私自身も「～しなくちゃ」と考えがちですが、ぎりぎりセーフを見つけることで余裕ができ、肯定的に考えることができるようになったと思います。
38 歳　女	保健師	自己肯定感が低く育児不安の強い方や、子どもに否定的な声掛けが多く、その影響が子どもの行動や発達に出ている方など、「障がい」ではないかもしれない母子においても、どのように保育士としてかかわっていったらよいか悩むこともありました。このプログラムに参加したことで、子どもとのかかわり方に悩む多くの保護者の方に、この考え方を広げていきたいと思いました。参加し、考え方を整理していくと、お母さん方もかわるんだということに気づきました。
33 歳　女	―	良かった事は、自分が子どもたちに対して口うるさくなりがちだったのが行動で見るようになり、自分の中で整理することができ、ほめ上手になったことです。気づいたことは、少し困ったところ、ギリギリセーフの見分け方、注意の仕方が出来なくなってしまいました。
45 歳　女	―	回を重ねていくことにより、困り感・良い所のとらえ方が変わりました。生活の中で頑張っている事、ほめられること（何気ないことでも）が多いと感じれた。（ほめられる所により、子どもたちも自信へとつながっていく）
48 歳　女	―	具体的行動で見ることが理解できるようになってからギリギリ OK　も探しやすくなったと思う。理想ではなく現実をきちんととらえていくことの大切さを感じた。前向きに子育てに取り組めそうだと思う。
58 歳　女	―	問題を書面に書いて話し合うことの効果を知り、ぜひ活用したいと思いました。お母さん方の悩みを共有できたことが本当に良かったです。解決はお母さんが主体とは思いましたが、仲間とともに主体的に考えるのが良かったと思う。

スタッフのアンケートのＱ2「ペアプロの内容やワークなどで難しかったこと」の回答一覧を以下に示す。こちらも参加者同様，行動でみることやカテゴリー分け等の内容自体の難しさに関して挙げられる感想も多かった。またスタッフ独自の感想として，ワークにおける参加者への声掛けや助言がうまくできなかったことや，中には，関わった参加者を不安定にさせてしまったなど参加者の状況を把握しておくべきだったという反省もうかがえた。

スタッフ対象アンケート　Ｑ2 の回答一覧

年齢	性別	職種	Q2 ペアプロの内容やワークなどで難しかったこと
31 歳	女	支援員	子どもの困っている行動は、親や周りが困っているのでは？子ども自身が困っている行動を見つけるのは難しいかなと思った。
32 歳	女	支援員	ギリギリセーフに置き換える。行動で見る、考える。この 2 つが簡単なようで、考え込んでしまうとだいぶ難しかった。
35 歳	女	支援員	はじめのうちは“行動で考える”が難しく感じました。
43 歳	女	支援員	初めのうちはお子さんを知らないので難しいと思っていたが、そうではないことに気づいた。
48 歳	女	支援員	動詞で書いていく、カテゴリーわけしていくなど、親さんの文章を見ながら一緒に考え促し導いていくのが難しかったです。
53 歳	女	事業所管理者	“行動”を動詞で記す事。より具体的な単語で表現する（語彙力不足を痛感)。普段の生活での応用。出来ていない中でもギリギリセーフで出来ている事を見つけてほめること、そのタイミングと表現の仕方。
33 歳	男	指導員	期間（開催日と開催日）があいたりして、前回の復習を自主的に行うのが難しかったです。具体的に動詞での表現をするということに対して慣れていなかったので、参加者への支援が難しかった（表現方法)。
33 歳	女	児童指導員	形容詞で物事を考えることが主流になっているので、動詞に置き換えて考えることが難しかったです。
35 歳	女	障害児支援員	間があいてしまうと前回の内容を忘れてしまうことがあった。
33 歳	女	生活支援員	カテゴリー分けになってから、何と何を合わせられるのか、どんなカテゴリーに分けられるのかが難しかったです。保護者さんの特質に合わせての声掛けの仕方や、時間の区切り方などタイミングをつかむこと。
45 歳	女	生活指導員･相談員	お母さんの精神状態の不安定さを引き出してしまい、事前に既往歴を確認すればよかったと思いました。
54 歳	女	大学院生(保育士)	「行動でみることができれば」というのが課題でありながら、6 回終わってみると困ったこともかなり改善されていたので驚きました。支援者として保護者に仲介していくタイミングと、どこまで伝えるかが難しいが（特に出すぎてしまう）辻井先生の意図を理解して、ここまで今日というラインがわかるとなんとかできるなと思いました。
30 歳	女	保育士	行動になおす…頭の柔軟さやアイディアがないと止まってしまうことも多かったです。お互いの話を聞き、よりやりやすいように、気持ちや意見が出しやすいように進めることが難しかったです。
33 歳	女	保育士	困っていることをあげること。自分の中では困っているがどのように困っているか具体的に書くことが難しく感じた。カテゴリーわけにする時の進め方。
45 歳	女	保育士	仕事との兼ね合いで全部出席することができなかった、残念です。1～2 回目は何がどうなっているのかわからず頭の中がぐちゃぐちゃでお母さんたちへの声掛けなどほとんどできずにつっ立ってました。どのような方向に導いていけばよいのか何がポイントなのかぱっと出ない…回数をこなさないと難しいと感じた。
53 歳	女	保育士	保護者さんへの助言や声掛け（適切な声掛けが出来ず）難しかったです。
59 歳	女	訪問支援員	できれば全回参加できればよかったと思います。現状把握表での整理の仕方など、復習できる時間が取れなかったので難しいと思いました。
26 歳	女	保健師	助言の仕方。ほめながら共感することはできても、具体的に助言するのは難しいと感じた。もう一度振り返り、今後に活かせるようにしていきたいです。
38 歳	女	保健師	回数も多いので、毎回参加できない場合もあるかと思います、地域でプログラムを実施する場合、欠席者文のフォローもしながら全体も進めていくのはなかなか難しいと感じました。
33 歳	女	―	今回のペアトレは内容が難しいのか簡単なのか状況の中で把握してるつもりですが、結構難しかったかなと思います。先生の威圧感に圧倒されてしまい、内容が頭に入ってこないのが現状です。
45 歳	女	―	行動で捉えること、動詞で表すことがとても難しいと思いました。
48 歳	女	―	最終回まで“行動で見ていく”をずっとむずかしいと思っていましたが、今回参加して、なるほどと思うことができました。
58 歳	女	―	動詞にする（行動を）こと、カテゴリーわけが難しかったです。

スタッフのアンケートのＱ3「あなたの地域でペアプロを実施するとした場合の施設やスタッフなど，具体的なイメージ」の回答一覧を以下に示す。ここでは，ペアプロの対象について，発達健診後のフォローでの実施や就学前の園児など，低年齢の子どもを持つ母親を想定した意見が多

くみられた。実施施設もそれに伴い，保健センターや保育園や幼稚園が出され，保健師や保育士，幼稚園教諭，心理士まで子どもの発達に携わる職種が広く挙げられた。中には自分自身の勤めている施設で実施してみたいというスタッフも少数ではあるがうかがえた。

スタッフ対象アンケート　Q３の回答一覧

年齢	性別	職種	Q3　あなたの地域でペアプロを実施するとした場合の施設やスタッフなど，具体的なイメージ
31 歳	女	支援員	障がいのあるなしに関わらず、幼稚園や保育園児を対象に行えればいいのかな、と思いました。
32 歳	女	支援員	就学前検診や小学校低学年など、できるだけ早い子ども対象なのがベストなのではないかと思う。各事業所と保健センターが連携して定期的に実施できるといいのではないか。今回のように顔見知りのスタッフや友人と一緒に参加することで、保護者同士も気楽に行えることができるのではないか。
35 歳	女	支援員	各市ごとに会場を設定し、各施設の参加者、スタッフが集まってやれるといいかと思います。各事業所ごとよりも、他の事業所の参加者、スタッフと一緒にやってみる良さを今回感じました。
43 歳	女	支援員	あまり固くない雰囲気で、子どもをそばの部屋で遊ばせながらできるところ。保健センターの広い部屋とか。スタッフは保育士さんも入ると良いと思う。
48 歳	女	支援員	県や市事業の一つとして開催し、進めていってほしい。
53 歳	女	事業所管理者	未就学の場合、保健センターでの健診後に保健師さんと中心に実施展開（事業所もスタッフとして参加）。現在のすこやか教室の実施内容に組み込んでもらえると事業所に紹介されてくる保護者さんの意識・理解が深まっていくと思います。
33 歳	男	指導員	行政と民間施設が協力し合いながら実施する。
33 歳	女	児童指導員	それぞれの施設・スタッフが連携を取りながら、協力してペアプロを実施する。
35 歳	女	障害児支援員	（無記入）
33 歳	女	生活支援員	自身の働いている施設で少人数でも行ってみたいです。
45 歳	女	生活指導員・相談員	療育に来ているほかの保護者さんに、今回参加したスタッフで実施したいと思います。ペアプロはどこの年代で実施しても有効な気がしますが、保護者の（未就学の）勉強会等で行えると良いのかと思いました。上手に出来てるようになった頃、自閉の保護者会で（数人なので）行ってみたいと思います。父親のペアプロはないのですか？
54 歳	女	大学院生（保育士）	健診後、育てるのが少し工夫がいるお子さんのタイプ（フォロー対象）の親子グループに、保健師と保育士で対応していく。子育て支援室のスタッフが仙台では保健センターにいくことがあるので、そうした場でとりくめて、広げていければいいと思います。
30 歳	女	保育士	保護者が参加しやすい環境が作れればと思います。知っている人がいると来やすいかなと思います。
33 歳	女	保育士	児童館のスタッフ。地域の方々（役所関係）スタッフ…いろいろな面からみえるのでアドバイスが増えそうだと思いました。
45 歳	女	保育士	地域の行政センター、保健所（郡山のニコニコ館）で保育士さんや保育士さんと。
53 歳	女	保育士	事業所を利用している保護者さん数名（2 名くらい）で、スタッフとお茶しながらお子様について話せていけたらよいかと想像しています。
59 歳	女	訪問支援員	とても良いプログラムだと思いました。連続でやることでの効果がわかりました。逆に難しさも感じましたので。
26 歳	女	保健師	心理士や保健師、保育士、教師など、子どもや家族が関わる人みんなで学ぶ機会となればよいと思う。学校や園の先生とも連携しながら、母をサポート（ほめることが続けられるよう）できる体制を整えられると良いのではないでしょうか。
38 歳	女	保健師	保健センターでは健診後など要フォローの方など声掛けしながら行えると良いかなと思います。ペアトレのところまでできたらなお良いかと思います。できれば進行役は専門の方にお願いし、参加者のフォローに入るのが地域担当保健師で、という形が良いかと思います。
33 歳	女	—	どうしても障害のある親御さんにはなんらかの特徴を持っている親がいます。先生もおっしゃっていたように、うつ病だったり気持ちがナイーブな親がたくさんです。こんな状況で先生に聞くにも聞けないような状況になるような場面、圧迫されるような雰囲気ちょっとつらかったです。もっと和やかな場で実施してほしい。
45 歳	女	—	施設含む園（幼稚園・保育園）の保育士さん・保健師さんたちの中で、保護者の方を踏まえ、少人数で行えたらと思います。（対象になる方との対応が難しく感じられます→保育園・幼稚園からの声掛けになると）
48 歳	女	—	私は今回の異動で（市役所）幼稚園に勤務することになりました。幼稚園、保育園の先生方のためのペアプロをしたいと思っています。その後、保護者向けのペアプロにしていけると良いのではないかと思います。まずは園の先生方に子どものとらえ方を学んでほしいし、私も保護者の方々にむねをはってペアプロをすすめることができると思うので…。午後 7 時くらいからの会は可能ですか？
58 歳	女	—	学校でも幼稚園の保護者会で全員にしてほしいです。時間もお金もか